

修了生答辞

公共政策大学院の名和宏晃と申します。本日は学位記授与式を開催いただき、修了生を代表して心よりお礼申し上げます。約 10 年前の高校生当時には縁がなかった東京大学で、いまこうして答辞を述べていることに不思議な思いです。

私は社会人学生として 2020 年春に入学し、長期履修学生制度を用いて 4 年間大学院で学びました。思い返せば、新型コロナウイルスに始まり今年元旦の能登半島地震など、様々な危機を目撃した 4 年間でした。

また、私のライフステージも大きく変化しました。仕事ではマネージャーに昇進し、管理職として周りからの期待や業務への視点が変わり、家庭では一児の父親となりました。履歴書上は箔が付いた一方で、実際には挫折や後悔の方が多く苦しい時期でした。仕事と学業の双方で、期待通りの結果が出せずに苦悩することや停滞感に憔悴する時期もありました。振り返れば、過去の実績から得た自信がいつしか過信や慢心になっていてと反省しています。そして、この葛藤から得た教訓は主に 3 点あると考えます。

1 つ目は、決して私は優秀ではないことです。何らかの成果を挙げたとき、自分の力量でやり遂げたと思いたい自分がいます。一方、周囲の支えなど様々な要因や環境に大きく左右されることを身に沁みて感じました。

2 つ目は、視野の狭さを意識する必要性です。4 年間学んでも、習得した知識は本棚一台程度に過ぎません。そのため、限られた知識や合理性の中で日々過ごしている現実を直視し、謙虚さを失わず学び続けることが重要です。

そして 3 つ目は、人生の転機は予期せず突然訪れるということです。社会変革も同様で、その瞬間までに入念な備えが必要です。私は博物館などに関する文化政策が専門であり、文化財の保存と活用の在り方を題目として修士論文を執筆しました。この分野は、日本社会の動態を踏まえれば、今後必ず対応が急務となる時期が来ると考えています。私自身、これからの政策実現の在り方に関する確固たる答えは未だ持っていませんが、今後の日々の実務を通じて、手探りながら向き合い続けたいと思います。そして、こうした試行錯誤の中で社会貢献を目指す営みこそが、本学の卒業生に期待される役割であり責任だと考えています。

本日ここにいる私達修了生は、これから三者三様の道を歩むことになります。不確実な未来を乗り越え、各人が進む道の途中でまたいつか再会出来ることを、私は楽しみにしています。最後になりますが、先生方をはじめ、家族や友人等、私達を支えてきたすべてに心から感謝と敬意を申し上げ、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。そして、皆様ご卒業おめでとうございます。

令和 6 年 3 月 21 日

修了生総代

公共政策学教育部公共政策学専攻

名和宏晃